



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	古代萬葉集研究史稿（その二）：古点以前の萬葉研究
Author(s)	大久保, 正
Citation	北海道大學文學部紀要, 10, 159-183
Issue Date	1961-11-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33266
Type	departmental bulletin paper
File Information	10_P159-183.pdf



古代萬葉集研究史稿（その二）

—— 古点以前の萬葉研究 ——

大久保

正

古代萬葉集研究史稿（その二）

——古点以前の萬葉研究——

大久保 正

第二章 古点以前の萬葉研究

（一）平城天子をめぐる問題

前章においてわたくしは平城朝をもつて萬葉研究史の上限とする見解を明かにしたが、その根拠は、『古今和歌集仮名序』に、「いにしへよりかく伝はれるうちにならの御時よりぞひろまりにける。かのおほん世や歌の心をしろしめしたりけん。かのおほん時におほきみつのくらゐかきのもとの人まろなん歌のひじりなりける。……又山のべの赤人といふ人ありけり。……この人々をおきて又すぐれたる人も、くれたけの世々にきこえ、片糸のよりくにたえずぞありける。これよりさきの歌を集めてなん、萬葉集となづけられたりける。……かの御時よりこのかた、年はもとせあまり、世はとつぎになんなりにける。」と言ひ、『同真名序』に、「昔平城 天子詔侍臣令撰萬葉集。自爾以來、時歴十代、數過三百年」と記す「ならのみかど」「平城天子」を平城天皇と解し、もと大伴家持の手中にあつたと考へられる萬葉集の原本が世に出る機会として平城朝が妥当性の大きい時代と考へられるところから、『古今和歌集』の序が何等かの根拠があつて

上の如く記したものと推定し、平城朝において手入が施され、ほぼ今日見る如き形に完成せられて世に出るに至つたものと考へたによるのである。このやうに萬葉集が平城朝に世に出て最後の完成を見た時期であると考へられるならば、そこに研究の機運が兆したであらうことは当然考へられる径路であり、後述する如く、平城朝を降るとやうやく萬葉集の書写伝来や、萬葉集に対する関心を示す記事が散見するやうになるのをもつてしても、平城朝をもつて萬葉集研究史の始期とすることは、資料的な面から見ても妥当なものであることが認められようと思ふ。

しかし、『古今和歌集』の両序に見える「ならのみかど」「平城天子」を平城天皇をさしたものとすべき明証はなく、既に平安朝の末からこれをめぐつて種々の議論があり、聖武天皇説（藤原仲実『古今和歌集目錄』、藤原清輔『袋草子』、仙覚『萬葉集註釈』）、聖武・孝謙天皇説（道因・勝命『難撰萬葉集時代条々事』、藤原俊成『萬葉集時代考』、孝謙天皇説（榮華物語）月の宴）、桓武天皇説（藤原清輔『袋草子』一説、藤原教長『古今集註』、藤原為家『古今集註』、高野辰之『古文学踏査』）、平城天皇説（顯昭『萬葉集時代難事』、同『古今集序注』、上寛『和歌色葉集』、折口信夫『古代研究国文学篇』、山田孝雄『萬葉集考叢』等が対立してゐる。

聖武天皇乃至孝謙天皇説についてみると、徳田浄氏がはやく指摘した如く、聖武天皇を、『日本靈異記』に、

諸葉宮御宇勝宝応真太上天皇之代（上巻第三）（十一條）

諸葉宮御宇大八嶋国勝宝應聖武太上天皇（中巻第一）（一條第）

諸葉宮廿五年治三天下勝宝應真聖武太上天皇（下巻第三）（十八條）

諸葉宮廿五年治三天下勝宝應真聖武太上天皇之御世（下巻第三）（十九條）と記し、また孝謙天皇を、

諸葉宮御宇大八洲国之帝阿倍天皇御代。（下巻第三）（一条）

同（諸）宮九年治天下帝姫阿倍天皇御世。（下巻第三）（十九條）

と記した例がある。しかし、これらはいづれも諸葉宮の宮号だけではなく、諱、諡号、年数等を併せ記してをつて、単に「ならの帝」、もしくは「平城天子」とのみで、古く聖武乃至孝謙の一代或いは二代の帝に限定して呼んだ例を見ない。これらの用例は、ほかに、淳仁天皇を、

奈良宮治天下大炊天皇御世天平宝字二年戊戌。（中巻第三）（十九條）

光仁天皇を

奈良宮御宇大八洲国白壁天皇世宝龜元年庚戌。（下巻第三）（十六條）

諸葉宮御宇白壁天皇御時。（下巻第三）（十六條）

と記すのと同様であつて、いづれも宮号のほかに諱、諡号、年数、年号等を併記して他と区別した用法のみである。

また、桓武天皇については、同じく『日本靈異記』に、

同（山部）天皇平城宮治天下丁丑。（下巻第三）（十八條）

平城宮治天下山部天皇御世延暦十七年之比頃。（下巻第三）（十九條）

と記した例があるが、これらもすべて諱や年号を併記した例のみである。（徳田氏は同書下巻第三十七條に「平城宮御宇天皇世」とあるを、桓武天皇をさした例として挙げてあるが、武田祐吉校註『日本靈異記』（『日本古典全書』）の頭注に云ふ如く、この世の人としてある佐伯宿禰伊太知は『統日本紀』に天平八年（786）から宝龜二年（787）にかけて見える人で桓武天皇の代をさしたものと見られない。頭注では「いづれの天皇の御代とも定め難いので、御名を挙げないのであらう」としてゐる。かくして「ならのみかど」、「平城天子」とのみで桓武天皇に限定して用ゐたものとするのは無理と考へられる。のみならず、「日本靈異記」には桓武天皇を、

平安宮治天下山部御世延暦五年歲次丙寅。（下巻第三）（十七條）

長岡宮御宇大八洲国山部天皇代延暦元年。（下巻第三）（三十條）

とも記し、桓武天皇は即位三年後には長岡京に遷都し、更に十年後には平安京に遷都されたのであるから、尚更紛らわしい「ならのみかど」、「平城天子」の称呼で『古今和歌集序』の筆者が桓武天皇をさしたとは考へ難い。それに対して、平城天皇は平安に都した天皇であり、在位の年数こそ短かつたが、奈良の旧都と文化を愛惜して、嵯峨天皇に譲位して太上天皇となられた後には遂に平城に宮を造営して移居し、平城の地で崩御され、平城天皇の諡号を贈られた唯だ一人の天皇であつて、顕昭も『萬葉集時代難事』に「今按。藤原宮、平安宮。平城宮者。皆是帝皇所居宮也。非諡号乎。其中天推国高彦尊天皇一人得平城諡号一也。又平城天皇之号。縦可通聖武孝謙者。古今序為避混濫。專不可載平城之号并十代之詞也。……仮名序縦雖載奈良帝之字。真名序何不奉聖武之諡号乎」と述べてゐる如く、これを平城天子と呼ぶことは自然であり、聖武、孝謙もしくは桓武を平城天子と呼ぶ場合に比し混乱の余地は渺いのである。顕昭はまた、「又以奈良一書平城一之条。不限萬葉。自余書籍皆以如此。然者平城奈良同名之条無疑事也。」と述べてゐるが、『古今和歌集』卷二春下、

ならのみかどの御うた

九〇 ふる里となりにし奈良のみやこにも色はかはらず花はさきけりの、題詞の右にも、流布本のほか、龜山切にも「平城天皇大同天子」の註記があり、昭和切には「大同帝」の註記があつて『古今和歌集綜覧』による）、この註記がいつ施されたものであるか明かでないが、古くから「ならのみかど」をもつて平城天皇に当てようとする心の動きがあつたことが感じられる（但し、卷五秋下、読人しらず、「たつた川もみぢみだれて流るめりわたらばにしきなかやたえなん」の歌に附

せられた「このうたはある人奈良のみかどの御うたなりとなんまうす」といふ古註には、昭和切に「文武天皇なり」の傍書があるが。

また、『大和物語』百五十三段にも平城天皇を「平城の帝」と記してゐる。(但し百五十段の「ならの帝」は不明)時代を降れば『扶桑略記抄』にも「平城天皇 五十二代 世謂奈良天皇」とある。但し、『帝王編年記』には、文武天皇に「諱輕 奈良帝」、聖武天皇にも「豊

稗命号三奈良帝」と記してゐるが、因より平城天皇にも「諱安殿 奈良帝」と記してゐる。さうして聖武天皇や孝謙天皇を「奈良の帝」「平城天子」と呼び得るとしても、顕昭も云ふ如く、古今集の兩序に、「かの御時よりこのかた、年はもとせあまり、世はとつぎになんなりにける。」「自爾以來、時歴十代、數過百年」と、十代、百年余の年代を明記してゐる事には何等かの根拠があつたとすべきで、人麿・赤人を平城天子と同時代の人と記すが如き、萬葉集の時代に対する認識を欠いてゐた兩序の筆者であつたとしても、十六代、その御代の最末から數へても一百五十七年を遡る聖武天皇や、同じく十五代一百四十八年前の孝謙天皇を指すところに筆者の意図があつたとは考へ難い。高野辰之博士が「如何に綴文上大數を挙げたにしても、之を百年となし十代となし得べくもない」と述べてゐる通りである。

平城天皇を指したものとすれば、大同元年三月踐祚の日から延喜五年四月十八日まで百年一ヶ月余となりびつたり年代が合ふことになる。ただあまりに年代がきちきちであり過ぎる感もあり、高野博士は、真名序のこの部分が『文選』の序の「自姬漢以來、眇焉悠邈。時更七代、數逾千祀」を摸したものであるとし、ここにいふ七代は当代の梁を加算せずに數へたものであるから、古今集真名序のばあひも醍醐の朝を計算に入れずに數へるべきであるとし、また、「平城天皇即位の年から起算して延喜五年迄では、辛うじて百年に達するのであつて、仮名序の「百とせあまり」とあるには合しない」として平城

天皇説を斥け、清輔の『袋草子』や教長の『古今集註』に見える桓武天皇説を復活し主張してゐる。確かに醍醐を入れずに數へれば、兩序に十代、百年余とするのによく合ふ。しかし、真名序が『文選』序を摸したといふ確実な証明はなく、また然りとしても必ず『文選』序のばあひと同じ數へ方をしたとも斷じられない。そして上にも触れた如く、平城の諡をもつ紛れもない平城天子、平城天皇をさしおいて、長岡を経て平安京に遷都し、平安新都の建設に努力を傾注した桓武天皇を、単に平城京に即位し、遷都まで數年をここに過ごされたといふだけで、平城天子の語をもつて表さうとしたと考へることは何といつても自然とも思はれない。さうして、現存本の萬葉集の原本は後に述べる如く奈良朝末までに家持の手ではほ縊められてゐたものと考へるが、その家持は桓武天皇の延暦四年八月に死んだのであつて、その死後二十余日に大伴継人、竹良等が中納言藤原種繼を射殺した事が發覺し、大伴氏一統が罪を蒙つた時に家持もこれに坐し、未だ葬らざるに庶人に貶せられ、財産皆官沒せられたのであり、『日本後紀』に見える如く、延暦二十五年(大同元年)三月、桓武天皇の病篤く十七日に勅によつてその本位を復せられるに至つてはじめてその罪を赦されたのであつた。そしてその日に桓武天皇は崩ぜられたのであつて、桓武天皇の代には家持は罪人であつたのであり、折口博士が「延暦四年以後の二十年は、罪人家持の作物が公然と人目に触れる事の出来たはずはない。此点でも、桓武帝説は無意味である」と述べられたのは、桓武天皇説にとつて看過し得ない難点と言ふべきであらう。更に、奈良の旧都とその古い文化に愛着を持ち、藤原薬子・仲成等の旧勢力に擁せられて、平安の新都を棄て、奈良の旧都に復しようとして失敗し、落髪して沙門となつた平城天皇の悲劇的性格から推し、またこの天皇の代に家持の手許から没収せられた萬葉集原本が再び世に出たと考へるべき根拠のある点から考へても、折口博士も述べられた如く、

この天皇の代に奈良朝の歌の一大集成と言ふべきこの集を補修完成しようとする考が起つたと推測することは極めて自然である。高野博士は、「此の頃(平安遷都)から漢学はますます栄えて、世好が一変しさうになつた。此の形勢を見られた天皇は、侍臣に詔して前代の古謡古歌を輯めて後代に伝へようとなされたのではあるまいか。」と推測してゐるが、その事は桓武天皇よりも平城天皇において一層適切であらう。桓武天皇は積弊を一掃すべく奈良の旧都を棄てて平安遷都を断行し、律令政治の整備と、漢文化の吸収に努めたが、反面和歌にも好尚を有し、遊獵や遊宴に際して古歌を誦し、またしばしば自作の歌を詠じたことは、『日本後紀』や『類聚国史』の伝へるところであり、この天皇によつて古歌の集大成が企てられたと想像することも不可能ではないが、しかし、奈良の旧都を棄てて平安新都の建設に邁進した桓武天皇にこの事を想像するよりも、平安の新京を棄てて奈良の旧都に復しようとして失敗した、折口博士の語を借りれば、「奈良の生活に憧れ、萬葉びとの生活を再しようとして遂げられなかった」平城天皇によつて、家持の手中にあつた老大な古歌の集が世に出たのを機としてその補修完成が企てられたことを想像することは一層適切であると言はなくてはならない。

清輔は『袋草子』上巻に「撰萬葉集」或称大同朝二疑桓武時一事」と題し、「大同朝即位之間纔四年宛如電光」。仙院之後又有事。不安穩。豈有撰集之興哉」と云つてゐる。平城天皇の在位は僅かに四年で、嵯峨天皇に讓位の後は薬子・仲成の事件があつて安穩でなかつたから、撰集の興はあり得なかつたであらうといふのである。現代では弥富破摩雄氏もまた、

平城天皇は御在位も短く、此の間災変多く、殊に疫病頻りに流行したために、大同類聚方一百巻の如き書はあらはれてゐるが、文事の如きは、帝の好まれる所ではなく、薬子を寵せられるに至つてから

の如きは、乱事多く、到底「平城天子詔侍臣令撰萬葉集」などの詞が、適応すべく考へられる時代ではなかつたことは、正史の証する所である。

と述べられてゐるが、在世が短かく治世も安穩でなかつたから撰集の事は考へられ難いといふ点は清輔の主張と一致するので後に纏めて考へるとして、先づ「文事の如きは、帝の好まれる所ではなく」といふのは納得し難い言葉である。世に平城天皇の御集と伝へる『奈良天皇御集』は疑問の多いものであるが、しかし、『類聚国史』には、大同二年九月二十一日、神泉苑に行幸し、琴歌が奏せられた折、皇太弟(嵯峨)の「皆人のその香に移る藤袴君が為にと手折りつるかな」といふ頌歌に和して「折る人の心のまにま藤袴うべ色ふかくにほひたりけり」の御製をもつて和したことを載せ、また、『日本後紀』大同三年九月の条には、十七日神泉苑に行幸の折、従五位下平群朝臣賀是麻呂に和歌を作らしめ、可是麻呂が

いかに吹く風にあれば大島の尾花の末を吹き結びたる
と詠んだのに歎悦して従五位上を授けた記事が見え、その和歌に対する好尚の並々でなかつたことが窺はれるのである。さうして、『古今和歌集』巻二春下に「ならのみかどの御うた」として載せ、『奈良天皇御集』巻首にも載る、

ふるさとふなりにしならの都にも色はかはらず花さきにけり

が、「さびれ行く奈良の旧都を愛惜し給うた平城天皇の御製と考へる事によつて、初めて正しい理解をすることが出来る」歌であることは、小沢正夫氏も述べられた通りである。折口博士は詩人肌の天皇の性格を論じてゐるが、以上の点のみをもつてしても、平城天皇に撰集の企てを想定することは決して不自然ではないのである。問題は、清輔も指摘する年代も短かく治世も安穩でなかつたから撰集の事が考へ難いといふ点であるが、われわれもこの朝に大規模な古歌の集成編纂

が遂行されたとは思はない。既に奈良朝に家持の手ではその編纂を了へてゐた現行二十巻の萬葉集が、この朝家持の復位に伴つて再び世に現れ、天皇の意志によりこれに補修が施されて完成するに至つたものではないかと推測するのみである。いかに在位が短かく、退位後は乱が起つたとしても、その程度の企がなされなかつたはずはないのである。

以上の考察からして、わたくしは「二つの序の最適切な解釈は、平城帝説の外にはない」といふ折口博士の説を再確認する結論に到達した。家持の手ではば纏められてゐた萬葉集が再び世に出て補修を施され、現存本の形をとるに至つたのは平城朝においてでなかつたかといふのがわたくしの結論である。

ただこれは、山田博士も述べてゐる如く、「勅撰集の序文ともあらうものが、百年許前の事をでたらめに書くといふこともあるべきで無い」といふ前提から出発した推論であつて、もしこの前提が覆されるならば、この結論にも動揺を來たさざるを得ない。弥富破摩雄氏は両序の記述が、『古今和歌集』卷十八雑下に載せられた、

貞觀御時、萬葉集はいつばかりつくれるぞとはせ給ひければ、
よみて奉りける

文屋有季

神無月しぐれふりおけるならのはの名におふみやのふることぞこれ

の「ならのはの名におふ宮のふること」即ち「ならの宮のふること」といふのは「奈良時代の古言」の意で奉答したものであつたのを、両序の筆者が「親しく古今集に撰入した其の歌の詞を早合点して、平城天皇と誤解したのであらう」と解し、「それも単に『ならの葉の名におふ宮』とあつた事からのみでなく、茲に彼の家持の公人に蘇つた時代を思ひ合せて見ると、彼等は必ず、此の事を兼てから、耳にしてゐて、其れに有季の詞を合せ解したものであつたのであらう」と述べて

ゐる。これは確かに在り得べき一つの有力な推定である。かくして弥富氏は上述の如く、平城天皇の勅命による撰進といふことを否定されるのであるが、しかし、氏も家持が延暦二十五年三月に至つて本位を復せられるに及んで、萬葉集が再び世に出るに至つたであらう事はこれを認め、

大伴家持は、茲に復活し、且つは今まで秘してあつた筈の歌巻――

此の時は既に、所謂南船北馬中の記録は散佚して居たのであらう――も、始めて憚りげなく世に出され、人の目にも触れるに至つたのであらう。かくして伝写され、抄録され、恐らく同時に、巻の順位も、萬葉集といふ題簽も記されたものであらう。思へ。延暦廿五年四月は大同元年である。大同は平城天皇の御代である。此の事実を決して輕視してはならぬ。

と述べてゐる。とすれば、平城天皇の朝に萬葉集が再び世に出て多少の補修が施され、現存本の形となつて伝來するに至つたと推定するわたくしの結論と五十歩百歩であつて、問題は平城天皇の勅命によつて企てられたものと見るか否か、またどの程度に補修編纂が行はれたと見るかの相違があるに過ぎない。前者については、わたくしは上述の如き平城天皇の性格と和歌に対する好尚とから、公の勅命であつたか否かは疑問としてもその意志を重視すべきであると考へるが、後者については、この朝に本格的な編纂撰録が行はれたとは考へ難いことは既に述べた通りで、家持の手ではば纏められてゐたものに多少の補修が施された程度ではなかつたかと考へるので、結果的にはほとんど弥富氏の見解と開きはないことになる。

わたくしは、古今集の両序に現れた「ならのみかど」、「平城天子」の問題を右の如く解釈し、それまでに現行本萬葉集の原本が家持の手ではば纏められてゐたとしても、それは公にはせられなかつたのであるから（萬葉集編纂の材料となつた歌集や歌巻の中には世に流布した

ものも尠くなかつたであらうが）、萬葉集研究史は、これが始めて公にせられたと考へられる平城朝をもつてその出発点とするのが妥当であると考へるのである。

（二） 平安初期における萬葉集の伝来

上述の如く、わたくしは萬葉集が完成したのは平城天皇の朝においてであつたと考へるが、それが平城天皇の勅命によつて撰進せられたものであつたか否か、またこの朝に家持の手ではば纏められてゐた萬葉集の原本が世に出たものとして、どの程度の補修編纂が行はれたかと云ふことになる、文献に徴すべきものがなく不明といふ外はない。折口博士は、家持の手を通つた材料の外に、今一つ、「大歌に昔から使はれて来た大歌と、大歌に採用する目的で蒐めて置いた材料」がその編纂の材料となつたものと推定し、

「其上、尚一つ、大歌所が、官庫に保存せられて居たと思はれる各種の古歌集・個人の家集の一群が、編纂の際に、随分利用せられたものと思はれる。大体、此三種が、大伴氏没落と共に、宮中で一つになる機会に接したわけである。而も、前言した素質を持つた平城天皇の御代であつたとすれば、萬葉集は、纏らなければならなかつたのである。萬葉集は、此様にしてなつた勅撰集であつたが、やつと巻一・二を撰定した頃に大頓挫が来たらしい。其為に、他の巻々は、大さつばな分類をつけた儘になつたものもあり、元の資料の排列順序の通りにして置いた巻などもある様である。大伴集の大部分は、かうして、其儘、五つの巻を形づくることになつたものと見える。だから撰者の如きも、大伴家持の努力が可なり、役立つて居ると言ふだけで、勿論、彼を以て当面の責任とする事は出来ない。

と述べ、平城天皇の朝に大伴集（萬葉集の末四巻、竝びに巻五がそれ

に当る）が手に入つたのを機会に、奈良以前の歌集を勅撰しようとする企てが起つて、種々の材料がここに一つに纏められるに至つたものと推定し、相当大規模な編纂が行はれたことを想定して居るもののである。

この考方は、萬葉集に収められてゐる歌で、萬葉集とは別系統の伝来を経て平安朝に伝へられたと考へられる歌が、後章で考察する如く、古今集、後撰集、拾遺集などの勅撰集、『秋萩集』、『継色紙集』、『新撰和歌』、『古今和歌六帖』などの私撰集、また『人麿集』、『赤人集』などの私家集に尠からず採られてゐることを考へ合はせると容易に捨て難い点もあるが、ただ、前章でも言及した如く、(一)萬葉集の古注の記載が宝字年間に止まつて宝龜の改姓名に及ばず、平城天皇の朝に新たに附せられた証跡を全く見ないこと、(二)平城天皇は在位わずか四年に過ぎなかつた上に、治世が安穩でなく撰集に十分な暇があつたと考へ難いこと。(三)巻十六までの十六巻に収められた作品で年代の明記せられてゐるものは、沢瀉博士が述べてゐる如くいづれも天平十六年以前のものである点から考へて、天平十六・七年の頃に十六巻は大伴とめられてゐたものと考へるのが適當であらうこと、(四)山田孝雄博士、沢瀉久孝博士、森本治吉博士など諸家が考察されてゐる如く、折口博士の大伴集と考へられた巻五のほかにも巻三、巻四、巻六、巻八、巻十四、巻十六など、家持の編纂もしくは校訂を経て伝へられたと推定される巻が尠くないこと（山田博士は巻十五も大伴三申によつて集められ、家持の手に伝はつたものと見てゐる）などの諸点から考へると、やはり現行の萬葉集二十巻は、家持の手で奈良朝末までにはば纏められてゐたものと見るのが妥当であらうと考へる。そして、この家持の手ではば纏められてゐた原本が、平城天皇の朝に家持の官没品と共に世に出、平城天皇の意によつて多少の補修が施され、今日見るやうな萬葉集がほぼ出来あがつたものと考へる。しかし、よ

しそれが折口博士等の説の如くはじめ勅撰として企てられたことがあつたとしても、現存本の雑然とした体裁から見ても、また何ら史書に記録をとどめてゐないことから見ても、勅撰集として撰定を見たものであるとは考へられない。どの程度の補修が施されたかも具体的には何も分らないが、目録などは、それが古くからのものであるらしい点から見て、或いはこの時に附されたものであつたかとも考へられないではない。

以上の推測にしてほぼ誤りがないとするならば、萬葉集がはじめに公にせられ、人の目に触れるに至つた結果として、やうやく萬葉集が人々の関心にもほり、伝写や抄録もされるに至つたことは想像に難くない。物語のことであるから、果して正実にかけてよいか否か疑問であるが、『源氏物語』の梅枝巻には「嵯峨の帝の古萬葉集をえらび書かせ給へる四巻」といふ記述が見えるのも右の推定とよく符合する。しかし、もし萬葉集が右の如き経路で公表されたものであつたとしても、その事情は早く忘れられたと見えて『古今和歌集』巻十八雜下に貞観の御時萬葉集はいつばかりつくれるぞと問はせ給ひければよみて奉りける 文屋ありす

神無月時雨ふりおけるならの葉の名におふ宮のふることぞこれといふ記載がある。清和天皇が萬葉集の成立について疑問を抱き下問があつたので、文屋有季が歌をもつて奉答したといふ記事であつて、清和天皇の萬葉集に対する関心が窺はれるが、当時もはや萬葉集の成立事情は不明となつてゐたものの如くである。そこで下問に対して、有季は歌をもつて奉答したのであらうが、その内容は「ならの葉の名におふ宮」といふ極めて漠然としたものであつて、何か抛るべき資料があつて奉答したものか否かも不明であり、「ならの葉の名におふ宮」が、漠然と奈良時代をさしたもののか、平城天皇の朝をさしたものであるかも議論の岐れるところである。もしも前者であつたとすれ

ば、この記事と歌を、古今序の筆者らが誤つて平城天皇と解するに至つたものであるとする前述の弥富氏の考も成立し得るのである。しかし、その場合も理由なくして古今集の撰者らが誤るはずもないから、弥富氏も認める如く、萬葉集が平城天皇の朝に世に出たことについて古今集の撰者らは何か聞知するところがあつたものと見るべきである。しかし、清和天皇の世に既にその成立事情が不明となつてゐたらしい点から見ても、平城天皇の朝に公式の勅命によつて撰集が企てられたと見ることはなほ疑問が残る。もしも公命によつて勅撰が企てられたものであつたとしたら、何らかの記録が残らなかつたはずはなく、清和天皇の朝にはやくもこれが不明に歸したといふことは疑問だからである。降つて寛平五年(863)の年記を有する『新撰萬葉集』の上巻序に、

夫萬葉者、古歌之流也。非_レ未_レ嘗_レ稱_レ警策之名焉。況復不_レ屑_レ鄭衛之音乎。聞説、古者飛文染翰之士、興詠吟嘯之客、青春之時、玄冬之節、隨_レ見而興既作、触_レ聆而感自生。凡厥所_レ草稿、不_レ知_レ幾千。漸尋_レ筆墨之跡。文句錯乱。非_レ詩非_レ賦、字對雜糅、難_レ入難_レ悟。所謂仰弥高、鑽弥堅者乎。然而有_レ意者進、無_レ智退而已。於_レ是奉_レ綸綍、綵緋之外、更在_レ人口、尺撰集、成_レ數十卷、裝_レ其要妙、韞_レ匱待_レ僞。唯_レ媿非_レ凡眼之所_レ可_レ及。……(傍線は筆者)

と、萬葉集の成立に関するやや詳しい記事を載せ、もと勅命を奉じて撰定したものに、後人が見聞したところを増補して数十巻と成し、その要妙を装釘したものが萬葉集であるとしてゐるのが注目されるが、何か抛とするところがあつて記したか否か明かでなく、その成立年代に関しては何等語るところがないので、萬葉集の平城朝における撰定を考へる上に直接参考とはならない。ただ右の序文中に、「文句錯乱、非_レ詩非_レ賦、字對雜糅、難_レ入難_レ悟」と言つてゐるのは、武田博士も指摘した如く、萬葉集を読むことに關して述べたものと思はれ、当時

萬葉集がいかに難解なものとなつてゐたかを示す資料である。しかし、この言のある所からすれば、当時その読法に關しても幾分かの考察はなされてゐたものと思はれる。

上述の如く、萬葉集は平城天皇の朝に世に出て伝來するに至つたものと考へられ、この時に平城天皇の意を体して多少の修補が施されたことは推定できるが、公命による勅撰事業が進められたとは必ずしも考へ難い上に、桓武天皇や平城天皇と異なつて一首の和歌をも伝へず、漢詩にすぐれ、その御代に『凌雲集』、『文華秀麗集』の二つの漢詩集を勅撰せられた嵯峨天皇に象徴せられる漢詩文の盛行によつて、平城朝に再び世に出て注目を浴びたと考へられる萬葉集も間もなく片隅の存在に押しやられる結果となり、書写伝來は細々と続けられたとしても、その成立事情もはやく忘れ去られて清和天皇の御下問となり、また、「文句錯乱、非詩非賦、字對雜糅、難入難悟」との『新撰萬葉集』撰者の慨歎を招くに至つたものと思はれる。

萬葉集に対する関心が再びおこつてきたのは、宮廷を席捲した漢詩に庄倒せられて、「半ば婦人の右となりて丈夫の前に進め難」(古今集真名序)いものとなつてゐた古來伝統の和歌が再び復興の機運に向つた時期と揆を一にするであらう。和田英松博士が指摘した如く、『源氏物語河海抄』に引く醍醐天皇の皇后藤原穩子の日記『太后御記』には、承平五年十二月九日の皇后御年賀の折に、御弟の摂政左大臣藤原忠平への贈物として、「せんだいの御てのまんえうしう」即ち醍醐天皇宸筆の萬葉集を下賜せられた記事が見え、萬葉集の書写に關する確実なものとしては最古のものであるが、『古今和歌集』の勅撰を命じられた醍醐天皇にその萬葉集書写の事実が知られることは意味深い。

この天皇の代における『古今和歌集』の撰進は、必ずやその先蹤としての萬葉集に対する関心を高める大きな契機をなしたと推測される。

(三) 古今集の撰進と萬葉集

『古今和歌集』の撰進に當つて萬葉集がその先蹤として意識せられたことは、その真名序に、「爰詔大内記紀友則。御書所預紀貫之。前甲斐少目凡河内躬恒。右衛門府生壬生忠岑等」。各獻家集。并古來旧歌。曰統萬葉集。於是重有詔。部類所奉之歌。勒為二十卷。名曰古今和歌集。」とあつて、その初稿本を統萬葉集と名づけたといふことから知られる。しかし、古今集の撰進は古きものを省みるものであり、『統萬葉集』の名はやがて『古今和歌集』の名に代へられたし、また序に記す如く、萬葉集の歌はこれを入集しない方針を採つたのであつた。したがつてその部類においても、萬葉集の雑歌・相聞・挽歌その他の部類は棄てられ、四季・恋を中心とする新しい部類が採られた。しかし、四季による部類も既に萬葉集に試みられたところであり、四季・恋・哀傷の部類はそれぞれ、萬葉集の雑歌・相聞・挽歌の部類に相當するものであり、萬葉集の羈旅歌・雜歌・東歌等の題目もそのまま踏襲されてゐるなど、巻数の二十卷をはじめとして萬葉集がその先蹤として参考せられたことは種々の点から推定することができる。漢詩集に代つて和歌集を勅撰した貫之等がその先蹤として萬葉集に關心を寄せたのは当然であつて、その序に一再ならず萬葉集の事に言及してゐるのもそれを示すものであつた。しかし、撰者を代表する立場にあつたと見られる貫之にしては、人麿と赤人を「奈良の帝」と同時代の人とする如き、萬葉集の時代に対する淺薄な理解の持主であり、後の學者を誤る原因をなしたこと上に見たが如くである。しかし、萬葉集が勅命によつて撰進する歌集の先蹤として意識せられた以上は、たとひ素朴ではあつても、この時に萬葉集に対して何らか

の研究が行はれたであらうことは想像に難くない。『和歌現在書目録』には、抄集家の部に「萬葉集抄五卷」として、「右一説紀貫之、一説梨壺五人抄之云々。」と見え、『八雲御抄』巻一にも「萬葉集抄 五卷抄貫之撰之。」と見え、顯昭の『袖中抄』巻五、及び「柿本朝臣人麿勸文」に、その序なるものが引用されてゐるが、今日伝はらず、これを貫之の著とすることの真偽も明かでない。今、『袖中抄』についてその序の引用を見ると、

顯昭考萬葉五卷抄云、謹案此集、古語雖実、比與幽微、字々感_レ人、句々変_レ体。今推_二作者之本意_一、令_二知者知之_一、不_レ知者不知_レ之、爰師說不_レ伝、訓釈無_レ書、案牘之間甚難_レ得心、天平勝宝五年春二月於_二左大臣橘卿之東家_一、宴_二飲諸卿大夫等_一、于_レ時主人大臣問曰、古歌云、あさもよひ如何、あがもへるきみ、其情奈何者、式部石川卿の說に云、あさもよひき所_二以然_一者、古俗語傳、朝炊_レ飯謂_二之あさもよひ_一也。紀新也、以療_レ之炊飯、因是將_レ曰_二紀伊國_一、發言以為_二あさもよひと_一耳云々。爰知、古歌難義、先賢發_レ疑、況後代愚叟、無_レ由_二拋勘_一。今伏古事記古語拾遺旧事本記大和本紀等、聊合_二首尾_一、頗以会釈、云々。〔謹案此集〕以下「無_レ由拋勘」までの文が、序の引用で他は顯昭の文である

とある。『人麿勸文』では、はじめに「萬葉五卷抄序云、柿本朝臣人丸歌集之」とあり、「天平勝宝五年春二月」以下はほぼ同文を引用してゐる。今これを参照して、その序に云ふところを見ると、萬葉集の歌が師説も伝はらず、訓釈の書もなくして解し難きを云ひ、「柿本朝臣人麿歌集」に記すところによれば、天平勝宝五年春二月、大臣橘諸兄の邸に諸卿大夫等を集めて宴飲した時、諸兄が「あさもよひき」の意を問うたのに対して、式部石川卿が朝、薪をもつて飯を炊く意で紀にかけたのだとこれを釈いたことが見えるが、このやうに先賢も疑を發してゐる程だから、まして後代の愚昧な者には抛をもつて考勘す

北大文学部紀要

べき方法がないといふのがその大意であるやうである。これらの序の引用以外には全く伝はるところがないのでこの書の性質も明かでないが、右の序の引用の言ふところによれば萬葉集の歌を訓釈した書であつたと思はれるが、これを貫之の著とする所伝の真偽を確かめることはほとんど不可能である。ただ強ひて言へば、『古今和歌集』撰進の中心的役割を演じ、撰集の先蹤として『萬葉集』に多大の関心を寄せたはずの貫之に萬葉集の歌を訓釈した書があつたとして決して不自然ではなく、貫之はその『新撰和歌集』の序を漢文で書いてゐるが、その中に「抑夫上代之篇。義尤幽而文猶質。」とあるのは、右の序の引用中に「古語雖実、比與幽微」とあるのと通じる思想であることも注意され、また右の文中「師說不_レ伝」とあるのも、山田孝雄博士が「紀師匠家曲水宴和歌」によつて、貫之を歌道の師匠としてその指導を受けてゐた一団の人々のあつたことを推定してゐる如く、師伝思想が貫之とその門下の間に芽生えたらしい点からみて、これを貫之の著としても、右の引用に見られる序の文に関する限りそこに矛盾はないと考へられる。

なほ右の『萬葉五卷抄』については、清水浜臣の『遊京漫録』に、三品氏豊之進。西洞院丸太町下る所に住す。云。貫之五卷抄。今南都西大寺にあり。下題には萬葉抄とあり。建仁年中鎌倉より写しとれるよしのおく書あり。合卷一冊にてやまととぢなり。萬葉十八、十九、廿の歌に点つけたるのみなりとぞ。

按ずるに貫之五卷抄の文。顯昭袖中抄におほく引き用ひたり。同物にや。

と見えるが、はやく契沖が『精撰本代匠記』の惣釈に、八雲御抄ニ五卷抄ト注セサセ給ヘルヲハ袋草子ニハ彼序ヲ引ニ不知作者ト云ヘリ。奥義抄ナドニモ序ヲノミ引テ其外引タル事ナケレバ本ヨリ早クヨリ失テ序ノミ残タル歟。

と述べてゐる如く、平安朝歌書に引用された序の外には、何等この書の所伝について記したものが見えず、江戸時代にも右の『遊京漫録』以外これに言及したものない点から見て、右の記述は頗る疑はしい。

右に述べた如く、貫之が五巻抄を撰したといふ所伝についてはこれを否定すべき根拠も無いけれども、また積極的にこれを肯定するに足りる論拠もなく、結局不明とするはかないが、貫之が萬葉集を読み、またその研究をしてゐたことは疑へ得ないこと上述の通りである。その序によれば、古今集は、『萬葉集にいらぬ古き歌』を今の歌と共に集めたのであるが、それは萬葉集の歌を知ることを前提とするのでなければ不可能なことである。

ただ、にもかかはらず、古今集の本文には、田中道麿の『撰集萬葉徴』によれば萬葉集の歌と目されるものが十一首(内二首は墨消歌)、採録されてゐることが問題となる。次にその十一首を挙げて萬葉集と比較し、その性格を検討して見よう。(古今集本文は日本古典文学大系本により、また萬葉集本文はほぼ新校萬葉集により、前野貞男『萬葉訓点史』(昭和三十三年刊)の推定古点をカタカナで併せ示した。

(一) 卷四秋上 題しらず よみ人しらず

192 さ夜なかとよはふけぬらしかりがねのきこゆるそらに月わたるみゆ

(万九百七十) 歌三首(人麿之歌集所出)

佐宵中等 夜者深去良斯 鷹音 所聞空 月渡見

ハフケスランカリガネノキコユルソラニツキワタルミユ

(二) 同 題しらず よみ人しらず

247 月草に衣はすらむあさ露にぬれてのちはうつろひぬとも

(万七) 寄草 1351 作者不明

月草爾 衣者將摺 朝露爾 所沾而後者 徒去友

ロモハスラムアサツユニヌレテノチハウツロヒヌトモ

(三) 卷十一恋一 題しらず 読人しらず

492 吉野川いはきりとほし行く水のおとにはたてじこひてしぬとも

(万十一、寄物陳思 2718 作者不明)

高山之 石本激千 逝水之 音爾者不立 恋而雖死

イハモトタギチユクミヅノオトニハタテジコヒハシヌトモ

(四) 同、題しらず 読人しらず

551 おく山のすがのねしのぎふる雪のけぬとかいはん恋のしげきに

(万八、冬相聞 1655 三国真人足歌一首)

高山之 菅葉之努芸 零雪之 消跡可曰毛 恋乃繁鶏久

マノスゲノハシノギフルユキノケヌトカイフモコヒノシゲケク

(五) 卷十四恋四 題しらず よみ人しらず

683 伊勢のあまのあさな夕なにかづくてふみるめに人をあくよしもがな

(万十一、寄物陳思 2798 作者不明)

伊勢乃白水郎之 朝魚夕菜爾 潜云 鯨貝之 独念荷指天

セノアマノアサナユフナニカヅクテファハビノカヒノカタオモヒニシテ

(六) 同 題しらず よみ人しらず

720 たえず行くあすかのかはのよどみなば心あるとや人のおもはん

このうた、ある人のいはく、なかとみのあづま人が哥也

(万七、寄河 1379 作者不明)

不絶逝 明日香川之 不逝有者 故霜有如 人之見国

ユクアスカノカハノヨドメラバユヘシモアルゴトヒトノミラクニ

(七) 卷十五恋五 題しらず よみ人しらず

758 すまのあまのしほやき衣をさをあらみまどほにあれや君がきまさぬ

(万三 413 大綱公人主宴吟歌一首)

須麻乃海人之 塩焼衣乃 藤服 問遠之有者 未著穢 (スマノ

アマノシホヤギギヌノフヂゴロモマドホニシアレバイマダキナレズ)

1073 四卷二十大哥所御哥、しはつ山ぶり

しはつ山うちいでてみればかさゆひの嶋こぎかくるたななしを舟

(万三 272 高市連黒人羈旅歌)

四極山 打越見者 笠縫之 島榜隠 棚無小舟 (ヨモヤマヲハ西

本願寺本シハツヤマ但シ青訓Vウチコエミレバカサヌヒノシマコギカクル
タナナシヲブネ) (参考『仙覚抄』ニ「古点ニハ、ヨモ山ヲト和ス。」云々ト
アリ)

1080 同、神あそびのうた、ひるめのうた

さゝのくまひのくま河にこまとめてしばし水かへかげをだにみん

(万十二 寄物陳思 3097 作者不明)

左檜隈 檜隈河爾 駐馬 馬爾水令飲 吾外將見 (サヒクマノハ西
本願寺本等サヒノクマVヒノクマガハニコマトメテコマニミヅカヘワレヨソ
ニミム)

1107 家々称証本之本作書入以墨滅歌 題しらず 読人しらず (巻十一

恋一)

わぎもこに相坂山のしのすゝきははいでずも恋ひわたるかな

(万十、寄花 2283 作者不明)

吾妹児爾 相坂山之 皮為酢す 穂庭開不出 恋渡鴨 (ワギモ
コニアフサカヤマノシノススキホニハサキイデズコヒワタルカモ)

1108 出題しらず よみ人しらず (巻十三恋三)

いぬがみのとこの山なる名とりがはいさとこたへよわがなもらすな
この哥、ある人、あめのみかどのあふみのうねめにたまへると

(万十一 寄物陳思 2710 作者不明)

狗上之 鳥籠山爾有 不知也河 不知二五寸許瀬 余名告奈

(イヌカミノトコノヤマナルイサヤガハイサトコタヘテワガナモラスナ)

以上十一首の外に『撰集萬葉徴』には、「萬七ノ十二フ、いとまあらばひろひに行也。古今廿スミケン」と貼紙してあるが、これは墨滅歌、巻第十四に貫之の作として、

道しらばつみにもゆかむすみのえのきしにおふてふ恋わすれぐさを載せてあるのが、萬葉集卷七撰津作 1147 の作者不明歌

暇有者 拾爾將往 住吉之 岸因云 恋忘貝 (イトマアラバヒロヒ
テユカスミヨシノハ西本願寺本等スミノエ但シノ、ニは青訓Vキシニヨ
ルトイフコヒワスレガヒ)

と酷似した作であることを指摘したものであるが、これは全く右の萬葉歌の焼直しではあるけれども、貫之の作と明記されて居り、萬葉歌とは認められない。これが墨滅歌となつた理由は、春日政治博士の説の如く、萬葉の歌に酷似し、かかる作が撰進の原本に入つてゐたとすると、杜撰の謗を免れ得ないものであつたため削除されるに至つたものかとも考へられる。これを除く十一首について検討して見ると、後に掲げる表に明らかな如く、萬葉集に作者を記す作も古今集ではすべて読人知らずとなつてゐるほか、題詞にも異同が尠くなく(一、二、四、六等)、また本文においても、一、二の如く、萬葉集の歌を忠実に伝へ、古点の訓みかたとほとんど一致するものもあるが、多くは歌詞に相当の相違があり、萬葉集の歌の読みを忠実に伝へた歌とは見られない点から見て、序にも萬葉集の歌を入れないことを明記してゐる通り、これらは直接萬葉集から採録されたものではなく、伝誦を通じて採録された口承歌であるか、もしくは萬葉集以外の資料によつて伝承され、萬葉集の歌と気づかれずに採録された歌であるかのいづれかであると考へられる。殊に、萬葉集に作者を明記する作のうち、八の高市連黒人の歌(万三 272)が古今集では大歌所御歌中に収められ、大歌所の謡物として伝誦されたものから採録されたと考へられ、また十

一の「いぬがみのとこの山なる」が「或人あめのみかどのあふみの采女にたまへると」といふ萬葉集と所伝を異にする左注を有するほか、萬葉集に作者を明記する四、七がいづれも古今集では読人知らずになつてゐること、更にそれらを除く八首が、すべて萬葉集の巻七、九、

十、十一、十三の伝誦歌の性格の濃厚な、作者を記さない巻々の歌であることは、右のやうな考方を有力に支持するものであると考へられる。次に、萬葉集の作者、題詞、本文との異同を一覧表として左に掲げておく。

古今			萬葉		
歌番号	作者	題詞ナド	作者	題詞ナド	本文
(1)	読人しらず	題しらず	ナ (人麿歌集)	歌 (人麿歌集)	
(2)	同上	同上	ナ 寄草	寄草	
(3)	同上	同上	ナ		一・二句、 イハモトタ タカヤマノ ギチ、コヒ 五句、ストモ
(4)	同上	同上	ナ 三 国 眞 人	足	一・二句、 タカヤマノ スゲノハシ ノギ、コヒ 五句、ゲケ
(5)	同上	同上	ナ		四・五句、 アハビノカ モヒニシテ
(6)	同上	同上	ナ	寄 河	三句、ヨド メラバ、 ユヘシモア ノミマクニ
(7)	同上	同上	ナ 大 網 公 眞 人	宴 吟 歌	三句以下、 フヂボロモ マドホロシ アレバレイ マ
(8)	大歌所御歌 りしはつ山ぶ	同上	ナ 高 市 連 眞 人	羈 旅 歌	二・三句、 ウチコエミ レバカサヌ ヒノ
(9)	神あそびの うた	同上	ナ	寄 物 陳 思	一句・サヒ クマノ、ワ レ ヨソニミム
(10)	読人しらず	同上	ナ	寄 花	四・五句、 ホニハサキ ワデズコヒ ワタルカモ
(11)	同上	同上	ナ	寄 物 陳 思	四句、イサ トコタヘテ

(本文は萬葉集推定古点との異同を掲げた。)

(四) 古点以前における萬葉集の訓読

前節では古今集に採録せられた萬葉歌を考察して、それらが萬葉集から直接採録されたものではなく、口承もしくは萬葉集と別系統の資料による書承を通じて古今集に採録せられるに至つた伝承歌であるといふ結論に到達したのであるが、かやうな口承もしくは書承による萬葉歌の伝承は、古今集においてはじめて現れたのではなく、古今集以前と推定せられる歌集にもかやうな伝承歌を伝へるものがある。それ

は古今集成立以前と推定されてゐる『秋萩集』(夙く法帖として世に行はれ、一般には秋萩帖の名で知られてゐるが、久曾神昇氏が歌集として取扱ひかく命名されたのに従ふ)、及び、詠作年代の知られる歌のうち、最も後れるのが延喜五年二月の歌で、久曾神昇氏が「古今集の第一次稿本の性質のもの」と考察して居られる『継色紙集』に見えるものである。後者については金井清一氏の詳細な研究もあるが、今は両集に見える萬葉歌を挙げて簡単な考察を加へて置く事とする。『秋萩集』に採られてゐる萬葉歌は左の六首である。(本文は久曾神

昇氏校『平安稀観撰集本文篇』に拠り、萬葉集の本文と対照して掲げた。萬葉集の本文は『新校萬葉集』に拠り、前野貞男氏『萬葉訓点史』の推定古訓を併せ掲げた。

(一)

(さむぎ脱力)

10 たかやまのしたくささやぎ。よをこよひもやはたわがひとりねむ

(万一、大行天皇幸三于吉野宮一時歌 74)

見吉野乃 山下風之 寒久爾 為当也今夜毛 我独宿牟 (右一首
或云天皇御製歌)

(ミヨシノノヤマシタカゼノサムケクニハタヤコヨヒモワレヒトリネム)

(二)

11 かぜをいたみおきつしらなみたかゝらしつりするあまのそでかへる

みゆ

(万三、角麻呂歌四首 294)

風乎疾 奥津白浪 高有之 海人釣船 浜曾奴
(カゼライタミオキツシラナミタカカラシアマノツリブネハマニカヘリス)

(三)

(衍力)

12 まちかねてわれはむかへらじむばたまのわがくろかみにしもはおく

とも

(万二、或本歌曰 89)

居明而 君乎者将待 奴婆珠乃 吾黒髪爾 霜者零騰文 (右一首古
歌集中出)

(キアカシテキミラバマタムヌバタマノワガクロカミニシモハオクトモハフル
トモ西・温・矢・京)

(四)

17 さなみやいたやまかぜのうみふけばつりするあまのそでかへるみ

北大文学部紀要

ゆ

(万九、槐本歌一首 171⁵)

寒波之 平山風之 海吹者 釣為海人之 袂変所見

(サクラナミ(ササナミノ西・温・矢・京)ヒラノヤマカゼ(ヒラヤマカゼ
ノ西・温・矢・京)ウミフケバツリスルアマンソデカヘルミニ)

(五)

25 よをさむみあさどをあけてわがみればにはしるたへにあわゆきぞふ

る

(万十、詠雪 2318)

夜乎寒三 朝戸乎開 出見者 庭毛薄太良爾 三雪落有 一云 庭

裳保杼呂爾 雪曾零而有

(ヨヲサムミアサドラアケテイデミレバニハモハダラニユキフリタリ)

(六)

37 みよしのゝやまべにすめばほととぎすこのまたちくきなかぬひはな

し

(万十七、橙橘初咲霍公鳥嚶。対ニ此時候ニ詠不レ暢志。因作三首短歌以散
鬱結之緒耳 391¹)

安之比奇能 山辺爾乎礼婆 保登等芸須 木際多知久吉 奈可奴日
波奈之

(アシヒキノヤマベニラレバホトトギスコノマタクキナカヌヒハナシ)

以上の如くで、『秋萩集』にはすべて作者名は無いが、右の本文を
萬葉集と比較して表を作ると左の如くで(萬葉の訓は推定古点によ
る)、すべて異同が尠からず、ほとんど一致すると認められるものは
一首もなく、萬葉集を忠実に訓じたものとは認められない。

番号	1	2	3	4	5	6
秋萩集	上句、タカ ヤマノシタ クササヤギ (サムキ)ヨ 三句、コヨ ヒモヤハタ	下句、 ツリスル アマノソ ミユ デカヘル	マ・二句 マ・二句 テワレハ (ム)カ ヘラジ	一・二句、 ヤサナミ マカゼノ	三句、ワガ ミレバ、 下句、ニハ シロタヘニ フルユキゾ	一・二句、 ミヨシノ ノヤマベ ニスメバ
萬葉集	上句、ミヨ シノノヤマ シタカゼノ サムケクニ 三句ハタヤ コヨヒモ	下句、 アマノツ リブネハ マニカヘ リヌ	一・二句 キ・二句 テキミラ バマタム	一・二句 ササナミ マカゼノ マカゼノ	三句、イデ ミレバ、 下句、ニハ モハダラニ タリ	一・二句 ア・二句 ノヤマベ ニラレバ

以上の比較によつて見れば、これらの歌が直接萬葉集から採録されたものとは認め難く、萬葉集と同一の歌が伝誦される間に変化を生じて採録されるに至つたか、もしくは萬葉集とは別系統の資料によつて伝へられた歌が採録されるに至つたかのいづれかであると考へられる。『歌経標式』に載せられた萬葉歌が古い撰にかかると見られる巻々や、作者不明の古歌謡を多く集められたと見られる巻々の歌に限られ、家持が新たに撰したと見られる巻々の家持及びその周辺の作を載せないのに対して、ここにただ一首ながら(六)の萬葉集巻十七、三九一の一の家持の詠の詛伝と見られる歌を載せてゐるのは注目すべきことである。一、二句の歌詞の相違を見れば、萬葉集から直接採録されたものとは見られないが、萬葉集が世に出て流伝を見た結果、かやうな詛伝を生じるに至つたものと見られ、萬葉集の歌の伝承の過程を示すものとして注意されるのである。

次に、継色紙集に採られてゐる萬葉歌は久曾神氏も指摘された如く左の六首である。(同じく久曾神氏校『平安稀観選集本文篇』に拠つてその本文を掲げ、萬葉集の本文と対照して見よう。)

(一)恋三

17 かつ見つゝなほやゝみなむおはらぎのうきたのりのしめならなく

に

(万十一、譬喩 2839 作者不明)

如くは為哉 猶八成牛鳴 大荒木の 浮田之社之 標爾不有爾
(カクシテヤナヲヤヤミナムオホアラキノウキタノモリノシメナラナクニ)

(二)

18 かはかみにあらふわかなのがれてもきみがあたりのせにこそよら

め

(万十一 譬喩 2838 作者不明)

河上爾 洗若菜之 流来而 妹之当乃 瀬社因目
(カハカミニアラフワカナノナガレキテハ瀬社伝承本「ナガレテモ」Vイモガアタリノセニコソヨラメ)

(三)

19 このよひのありあけのつきのありつつも君をおきてはまつひともし

し

(万十一 寄物陳思 2671 作者不明)

今夜之 在開月夜 在作文 公乎置而者 待人無
(コヨヒノヤアリアケノツキノアリツツモキミヲラキテハマツヒトモナシ)

(四)

20 あすかどはせどなたまものうちなびきこゝろは君によりにしものを

(万十三 相聞 3267 反歌、作者ナシ)

明日香河 瀬湍之珠藻之 打靡 情者妹爾 因来鴨
(アスカガハセゼノタマモノウチナビキココロハイモニヨリニケルカモ)

(五)

21 おもはむといひてしものを (以下欠)

(万四 相聞、大伴坂上郎女歌六首 697)

不念常 日手師物乎 翼酢色之 変安寸 吾意可聞
(オモハジトイヒテシモノヲ)

22 いそのかみふるともあめにさはらめやいもにあはむといひてしもの
を

(万四相聞、大伴宿禰像見歌一首 664)

石上 零十方雨一 将関哉 妹似相武登 言義之鬼尾
(イソノカミフルトモアメニサハラメヤイモニアハムトイヒテシハチギリシ

西・温・矢・京モノヲ)
これを前の例に倣つて萬葉集の推定古訓と対照してその異同を表に

してみると、ほぼ左の如くである。

歌番号	1	2	3	4	5	6
継色紙集	第一句、カ ツミツツ 第三句、オ ハラギノ	第三句、ノガ レテモ、 第四句、キミ ノ	第一句、コ ノヨヒ 第五句、ヨリ ニシモノヲ	第四句、ココ ロハキミ ニシモノヲ	第一句、オ モハムト	
萬葉集	第一句、カ クシテヤ 第三句、オ ハラギノ	第二句、ナガ レキテ (ナガコ ヨヒノ)	第一句、コ ノヨヒ 第五句、ヨリ ニケルカモ	第四句、ココ ロハキミ ニシモノヲ	第一句、オ モハジト	

(四)は継色紙集の歌、二句のみで第三句以下を欠いてゐるので除くとして、(六)が萬葉集の推定古点と継色紙集の歌詞と全く一致し、(三)も第一句に少異があるのみであるのは注意される。しかしながら、かやうな例があるからと言って、継色紙集の萬葉歌が直接萬葉集から採録されたものと速断することはできない。(一)、(二)、(四)には、古点以前と考へられる当時の訓読の未熟幼稚を考慮に入れても、なほ且つ直接萬葉集の本文に即いて訓んだものとは容易に考へ難い萬葉本文との開きが見られるのである。殊に(二)、(四)において、萬葉集の歌における「君」が、継色紙集ではいづれも反対語の「妹」に置き換へられてゐること

が注意される。もしも直接萬葉集に拠つたものであれば、「君」をわざわざ反対語の「妹」に置き換へた理由を合理的に説明することはむづかしいであらう。然るにかうした性を示す人称代名詞の反対語への転換は、平井卓郎氏が「古今和歌六帖」における萬葉歌について明らかにされたやうに、歌が伝誦されるばあひには、その流動変化の過程にしはしばし現れる、伝誦歌の一特質とも言ふべき普遍的現象であることが知られるのである。「継色紙集」のばあひも、編者が故意に改変したものと解するのは明らかに不自然であつて、伝誦における流動変化の痕をとどめたものが、この「君」から「妹」への転換であると解すべきものであらう。採録された萬葉歌を萬葉集の巻別に見ても、巻十一の歌が三首、巻十三の歌が一首で、やはり作者不明の伝誦歌的性格の歌が大部分を占め、この点から見ても継色紙集の萬葉歌の多くは、直接萬葉集から採録されたのではなく、伝誦歌、もしくは萬葉集とは別系統の資料から採られたものであらうと考へられる。しかし、(六)は巻四に載る大伴像見の歌であり、(四)もまた萬葉集巻四、六五七と同歌とすれば大伴坂上郎女の歌であつて、六首中萬葉集巻四の歌が二首も採られてゐるのは注意される。平井卓郎氏の調査によれば、『古今和歌六帖』の萬葉歌においても、首位を占めるのは主として巻十一・十・七、次いで巻九・十二などの作者未詳の伝誦性の濃い巻々の歌であるが、これら首位を占める巻にまじつて、巻八・四、次いで巻三・十九の大伴家に関係の深い巻々の歌が多く採られてゐることが明かにされてゐる。そして、平井氏はその原因を考察して、萬葉集最終期の代表歌人としての家持の歌風が平安時代の人々に迎へられ、また家持とその周囲の多くの女性達との間における相聞歌に対する興趣が大伴一族にまで及ぶに至つたものであらうと推定して居る。更に氏は、「古今六帖」の編者と大伴家との間に何等かの密接な繋がりがあつたのではないかと想像して居るが、このやうな傾向がすでに「秋

萩集」(上に見た如く、巻十七の家持の歌が採られてゐる)、「継色紙集」にも現れてゐるところから見ると、この想像は穿ち過ぎであらうと考へられる。全体的に言へば「継色紙集」の萬葉歌もまた「秋萩集」のそれと同じく、直接萬葉集に拠つて採録されたものとは考へ難いが、「歌経標式」の萬葉歌のふくまなかつた。大伴家関係の巻々の比較的新しい歌を載せてをり、しかも上の(内)の歌の如く、萬葉集の本文との間にほとんど開きがなく、推定古点と一致する本文を示すもののあることは、萬葉集が人の目に触れ、読まれるやうになつた結果であらうと考へられるのである。(内)の歌が推定古点と一致する故をもつて、継色紙集の成立を古点以後とする見解も生じるかも知れないが、それは速断であつて、むしろ、上田英夫博士が言はれた如く、古点が伝誦歌の呼吸を利用して訓じることがすくなくなつたために、このやうな一致を生じたものと解するのが妥当であらう。

久曾神氏の推定にしたがつて、「秋萩集」「継色紙集」を「古今集」以前と考へて誤りがないとすれば、上に見た如く、古今集以前において萬葉集の歌の中には何人かによつて訓誦が施され、更に伝誦や書承を通じて他の歌集中に採録されたものがあつたと推測できると思はれる。天曆の世に行はれたいはゆる梨壺の古点は、勅命によつて萬葉集の大部分に訓点の施された大規模な公的事業として、萬葉訓点史上眞に劃期的なものであつたが、しかし萬葉集の訓誦はこの時はじめて行はれたのではなく、それ以前にも部分的に萬葉集の訓誦が行はれてゐたことは疑がない。ただその実体を明かにすることは困難であるが、武田祐吉博士が指摘した如く、萬葉集巻十、二二七九の「吾郷爾今咲花乃女郎花不堪情尚恋二家里」の第三句「女郎花」を、元暦校本、西本願寺本等に「娘部四散之」、類聚古集に「女郎部四散之」、紀州本に「女郎部四散之」、大矢本、京大本に「娘散之」に作るのは、細井本に「女郎花」に作り下に小字で「女郎花一本作娘部四一本作娘散之」とある

のを参照すると、散之などの文字は訓注を誤つて本文に衍入するに至つたものであらうかと考へられ、更に、巻十九、四二七五の
天地与 久萬氏爾 萬代爾 都可倍麻都良牟 黒酒白酒乎
の歌の本文の次に、元暦校本に

愛女川知登非左之期末天余与呂川与耳岐の〜末都良舞具呂期志呂美伎遠

の行があり、また類聚古集にも本文の次に、

或本云阿免川知登非佐之期末天爾与川与耳徒可末都良舞具呂期吉呂伎遠

の行があるのは、一種の別提訓であらうと考へられ、古点以前の古い訓点の姿を伝へるものではないかと考へられる。そしてこれらの本文の用字法を見るに、(一)上代特殊仮名遣の違例が極めて多く、女。(甲類、天のメは乙類)、非。(乙類、久しのヒは甲類)、呂(乙類、萬代のロは甲類)はすべて特殊仮名遣に反してゐる。(二)愛(萬葉集ではア行のエの仮名)、川、期(萬葉集ではゴ甲類の仮名)、天など、奈良朝には使用例が無いが、もしくは稀れな仮名字母が使用されてゐる。(三)伎、の、〜、の如く平仮名字体が現れてゐる。の三点からして、この萬葉仮名の訓が施されたのは平安朝に入つてから後と考へられる。してみれば、この別提訓は平安朝に入つて後に萬葉集の歌が一部訓誦され、萬葉仮名をもつてその訓を記載したことのあることを証する例と見られるであらう。わづかな例ではあるが、これによつてわたくしは、萬葉集が古点の施される以前、未だかな文字の普及を見る以前から、萬葉集が一部の人々には読まれ、萬葉仮名をもつて一部の歌に訓点が行はれたこともあつたと推測するのである。しかしそれはごく部分的へた複雑な記載法で記された萬葉集は愈々読み解き難いものとなり、

かな書きの和歌を見馴れた人々の目には、やうやく別世界の観を呈するに至つたものと推測される。「文句錯乱、非詩非賦、字対難採、難入難悟」といふのは、ひとり「新撰萬葉集」の編者のみの嗟歎ではなかつたであらう。固より、萬葉集は引きつづき読まれることはあつたであらうし、古今集が序文に「萬葉集に入らぬ古き歌」云々と云ひ、萬葉集の歌を除く方針の下に撰ばれたのも、萬葉集が当時或る程度まで読み得られたことを前提としてはじめて理解し得るのであるが、その読解にはよほどの困難が伴つたであらう。上述の如く、古今集撰者の中でも学識の秀でてゐたと考へられる貫之にしては、その序文の記載をもつて推しはかれ、萬葉集に対する理解のおぼろげなものであつたといふ事實はこれを証して余りあるものであらう。おそらく当時の人々は萬葉集の文字を追つて忠実にこれを読み解いたのではなく、上田英夫博士が述べてゐるやうに、むしろ萬葉時代からの古歌の伝誦に相当通じて居り、これに助けられておぼろげながら或る程度まで萬葉集を読み得たのであらう。かうした古歌の伝誦が一種の訓点の役割を果たしてゐたと云ふのが当時の実情に近かつたのではなからうか。古点もしくはその前後と考へられる萬葉集の歌の古訓に、原文の文字から離れた訓の施されてゐることが尠くないといふ事實は、かうした実情を反映するものと見てよいであらう。

このやうに古今集が萬葉集の歌を採録しない方針であつたにもかかはらず、萬葉集の歌と目されるものが十一首採られてゐることは上述した通りだが、しかしそれは伝誦歌を通じて入つたものと認められたことは上に考察した如くであり、中にはほとんど別歌と見てもよい程本文に開きを生じてゐる歌もあるから、この数は古今集が読み人知らずの古歌を多数採録してゐる点から見て必ずしも多い数とは言へず、古今集の撰者が萬葉集の歌を読んでこれを知つてゐなかつたならば、萬葉歌の撰入はこの程度にはとどまり得なかつたであらうと思はれ、

古今集の撰者が萬葉集を或る程度まで読み解き得て居つたればこそ、多数の伝誦歌を採録しながら、萬葉歌の撰入をこの程度に抑へることができたものと考へるのである。春日政治博士によると、通行本に墨減歌となつてゐる「わぎもこに相坂山のしのすゝき」(一一〇七)、「いぬがみのとこの山なる名とりがは」(一一〇八)の二首以外にも、本により、

しながどりのな野を行けばありま山夕霧立ちぬあけぬこのよは (元永本、羈旅)

(萬七、114) 作者不明、志長鳥、居名野乎来者、有間山、夕霧立、宿者無為一本云、猪名乃浦同乎 (榜来者)

あすよりはわかなつまむと片岡のあしたの原はけふや焼くらん (道家本、春上) (萬八、1427) 山部赤人、従明日者、春葉將採跡、標之野爾、昨日毛今

日毛、雪波布利管

すまのあまの塩やき衣なれぬればうとくのみこそ思ふべらなれ (元

永本、恋五、清輔本・道家本、恋三)

(萬十一、262) 作者不明、志賀乃白水郎之、監焼衣、雖穢、恋云物者、忘金津毛)

の如く、萬葉集と目される歌を収めてゐるもののあることを指摘され、このやうな通行本に無い歌を載せてゐるのがより古い形であつて、これらが後人の手によつて削除されて通行本から姿を消すに至つた一つの理由は、それが萬葉集の歌であることが分つて削除されるに至つたことによるものであらうと考察してゐる。これは極めて興味のある考察であつて、古今集の伝来の過程において萬葉歌が削除されたことを示すものであり、さうした過程にも萬葉集の研究の進展が窺はれると考へられるが、古今集編纂の方針から見て同様のことは古今集編纂の過程にも行はれたことと推測され、古今集編纂の際に萬葉歌で

あることの判明したものは削除されたのであるが、なほ当時の萬葉研究の状態をもつてしては、そのすべてを一々萬葉集について検証することは不可能であつて、その結果十数首の萬葉歌を萬葉集にある歌とは知らないで採録する結果になつたものであらうと考へる。さうしてそれらの中のあるものは後人によつて萬葉集の歌であることが判明して判除されたのであるが、それでもなほ通行本に十一首の萬葉歌をとどめることになつたものと考へられるのである。

(五) 紀貫之における萬葉歌の影響

古今集の撰進当時、萬葉集が歌集の先蹤として関心をあつめ、或る程度まで萬葉集の読解が行はれたであらうことを上に考察したが、次に古今集の代表的歌人であり撰者である貫之の歌に萬葉集がどのやうな影響を与へてゐるかを考察して見たいと思ふ。貫之を特にとりあげるののは、貫之が古今集の代表的歌人であるからといふばかりではなく、古今集の読人知らずの歌が詞句の上に表現の上に多く萬葉集の遺響を多くとどめてゐることは一般に知られてをり、服部喜美子氏の精細な研究もあるが、古今集の名ある歌人には萬葉集の影響を指摘できるものが尠く、壬生忠岑の如きも、「ふる歌にくはへてたつまれる長歌」(「古今和歌集」巻十九、一〇〇三)を作り、

くれ竹の よゝのふるごと なかりせば いかほの沼の いかにし
て 思ふ心を のばへまし あはれむかしべ ありきてふ 人まろ
こそは うれしけれ 身はしもながら ことの葉を あまつ空まで
きこえあげ すゑの世までの あとゝなし……

と人麿を詠んでをり、且つ、

夏くさのうへはしげれるぬま水のゆくかたのなきわがこゝろかな

(古今十物名、462、かたの)

が、人麿の「壇安乃 池之堤之 隠沼乃 去方乎不知 舍人者迷惑」(萬葉二、201)の影響を受けてゐるかと推定されるなど、若干萬葉集から詞句その他に影響の考へられる作がなくはないけれども、概して言へば萬葉の影響を明瞭に指摘できる作は多くないのに対し、既に弥富破摩雄氏や土屋文明氏の考察もある如く、貫之の作には萬葉集の詞句や趣向を模倣したらしい形跡の認められる作が尠くなく、古今集の歌人中もつとも萬葉集の影響を明瞭に看取することができ、これによつて貫之によつて代表される古今集の歌人がいかなる態度で萬葉集の歌に接し、これを受容したかを知ることができるかと考へられるからである。

弥富・土屋両氏の調査に見える九首を基礎とし、更にわたくしの調査で補つて貫之の作歌中詞句その他に萬葉集の影響の認められる歌を拾ひあげてみると、すくなくとも左の如く四十首以上にそれが認められるやうである。

(一) 我せこがころもはるさめ降る毎にのべのみどりぞ色まさりける (古今一、春上25)

(万十 2196 四具礼能雨 無間之零者 真木葉毛 争不勝而 色付爾家里 (古今二、春下89)

(二) さくら花ちりぬるかぜのなごりには水なきそらになみぞたちける (古今二、春下89)

(万七 1068 天海丹 雲之波立 月船 星之林爾 榜隠所見 (古今二、春下94)

(三) みわ山をしかもかくすかはるがすみ人にしられぬはなや咲くらん (古今二、春下94)

(万一 18 額田王 三輪山乎 然毛隠賀 雲谷裳 情有敵 可苦佐布倍思哉 (古今五、秋下256)

(四) 秋かぜのふきにし日より音羽山みねのこずゑもいろづきにけり (古今五、秋下256)

(万十 2193 秋風之 日異吹者 水茎能 岡之本葉毛 色付爾家里 (古今五、秋下256)

(五) ゆふ月夜をぐらのやまになく鹿のこゑのうちにやあきはくるらん

(万八1511) 岡本天皇 (齋明か) 御製 暮去者 小倉山爾 鳴鹿者 今夜波不鳴
寝宿家良之母

(古今五、秋下312)

(内) 冬ごもりおもひかけぬを木の問より花とみるまでゆきぞふりける

(古今六、冬331)

(万五844) 小野国堅 伊母我陸邇 由伎可母不流登 弥流麻提爾 許許陀母麻我

不 烏梅能波奈可毛

(春) 春くればやどにまづ咲くうめの花きみが千とせのかざしとぞ見る

(古今七、賀352)

(万五818) 憶良 波流佐礼婆 麻豆佐久耶登能 烏梅能波奈 比等利見都都夜

波流比久良佐武

(古今八、離別404)

(八) 結ぶ手のしづくににぐるやまの井のあかでも人にわかれぬるかな

(古今十、物名461)

(万十六3807) 安積山 影塞所見 山井之 浅心乎 吾念(古真国)

(九) あしひきの山辺に居ればしら雲のいかにせよとかかはる時なき

(古今十一、恋一471)

(万十七3911) 家持 安之比奇能 山辺爾乎礼婆 保登等芸須 木際多知久吉 奈

可奴日波奈之

(二) よしの川いはなみたく行く水のはやくぞひとをおもひそめてし

(万十一2430) 人麿歌集所出 是川 水阿和逆纏 行水 事不反 思始為

(二) 逢ふことは雲のはるかになるかみの音にききつゝこひわたるかな

(古今十一、恋一482)

(万十一2658) 天雲之 八重雲隠 鳴神之 音耳爾八方 聞度南

(北) 天文学部紀要

(三) のふれど恋しきときはあしひきの山よりつきのいでゝこそ来れ

(古今十三、恋三633)

(万十二3002) 足目木乃 従山出流 月待登 人爾波言而 妹待吾乎

(三) みちしらばつみにもゆかんすみのえの岸におふてふこひわれ草

(古今十四、恋四墨消歌)

(万七1147) 暇有者 拾爾将往 住吉之 岸因云 恋忘月

(四) おきつ浪たかしのはまのはま松の名にこそきみをまちわたりつれ

(古今十七、雑上915)

(万二66) 置始東人 大伴乃 高師能浜乃 松之根乎 枕宿杼 家之所徳由

(五) 思ひやるこしの白山しらねどもひと夜もゆめにこ (元永本み) え

ぬ夜ぞなき

(古今十八、雑下980)

(万三313) 万理宣令 見吉野之 滝乃白浪 雖不知 語之告者 古所念

(六) 君がさすみかさの山のもみぢ葉のいろ神無月しぐれの雨のそめる

なりけり

(古今十九、旋頭歌1010)

(万八1554) 家持 皇之 御笠之山能 黄葉 今日之鐘礼爾 散香過奈牟

(七) 花見にといでにしものを秋の野の霧に迷ひてけふは暮しつ

(後撰六、秋中272)

(万七1250) 妹為 菅実採 行吾 山路惑 此日暮

(八) 白妙の衣かたしき女郎花さけるのべにぞこよひねにける

(後撰六、秋中342)

(万八1424) 赤人 春野爾 須美礼採爾等 来師吾曾 野乎奈都可之美 一夜宿二

来

(元)長月の在明の月はありながらはかなく秋はすぎぬべら也

(万十 2300) 九月之 在明能月夜 有乍毛 君之来座者 吾將恋八方 (後撰七、秋下 441)

(三)月かへて君をば見むといひしかど日だにへだてずこひしきものを

(万十二 3131) 月易而 君乎婆見登 念 鳴 日毛不易為而 恋之重 (後撰十一、恋三 743)

(三)逢坂の関の清水にかけ見えて今や引くらむ望月の駒 (拾遺三、秋)

(万八 1435) 厚見主 河津鳴 甘南備河爾 陰所見而 今春開良武 山振乃花

(三)天雲のよそのものとは知りながら珍らしきかな雁の初声

(万十 2132) 天雲之 外鴈鳴 從聞之 薄垂霜零 寒此夜者 一云 弥益益 (貫之集二 101)

(三)いづれをか花とは分かん長月の有明けの月にまがふ白菊

(万十 2229) 白露乎 玉作有 九月 在明之月夜 雖見不飽可聞 (貫之集二 102)

(三)山藍もて摺れる衣の赤紐の長くぞわれは神につかへん

(万九 1742) 高橋蟲鷹 紋照 片足羽河之……山藍用 摺衣服而…… (貫之集二 137)

(三)飯庵にてひさに経にけり秋風に早稲田かりがねはやも鳴かなん

(万八 1566) 家持、久堅乃 雨間毛不置 雲 隱 鳴曾去奈流 早田鴈之哭 (貫之集二 153)

(三)なぐさめて一睡だに寝ん月影に山時鳥鳴きて行かなん

(万九 1728) 石上卿、名草目而 今夜者寢南 從明日波 恋鳴行武 從此間別者 (貫之集三 229)

(三)綱はへてもりわたりつるわが宿の早稲田かりがね今ぞなくなる

(万十 2219) 足曳之 山田佃子 不秀友 繩谷延与 守登知金

(六)かけて思ふ人もなければ夕されば面影絶えぬ玉かつらかな

(万二 149) 倭太后、人者縦 念息登母 玉 藤 影爾所見乍 不所忘鴨 (貫之集五 537)

(元)風吹けば絶えず波越す磯なれやわが衣手のかはくときなき

(万七 1394) 塩満者 入流磯之 草有哉 見良久少 恋良久乃太寸 (貫之集五 551)

(万十 1994) 夏草乃 露別衣 不著爾 我衣手乃 干時毛名寸

(三)五月山こずゑを高み時鳥鳴く音空なる恋もするかな (貫之集五 582)

(万十 2672) 此山之 嶺爾近跡 吾見鶴 月之空有 恋毛為鳴

(三)さを鹿のなきてしがらむ秋萩における白露われもけぬべし

(万八 1598) 棹牡鹿之 朝立野辺乃 秋芽子爾 玉跡見左右 置有白露 (貫之集五 586)

(三)雨降れば色去りやすき花桜うすき心もわが思はなくに (貫之集五 608)

(万二十 4478) 大原桜井真人 佐保河波爾 許保里和多礼流 宇須良婢乃 宇須伎許己呂乎 和我於毛波奈久爾

(三)今年生ひの新桑繭の唐衣千代をかけてぞ祝ひそめける

(貫之集六 691)

(万十四 3350) 筑波禰乃 爾比具波麻欲能 伎奴波安礼杼 伎美我美家思志 安夜爾伎保思母)

(三) 雨降れば北にたなびく天雲を君によそへてながめつるかな

(万二 161 持統天皇 向山 陳雲之 青雲之 星離去 月半離而) (貫之集九 793)

(三) 白雲のたなびきるたる倉橋の山の松とも君は知らずや

(万七 1282 橋立 倉椅山 立白雲 見欲 我為苗 立白雲) (貫之集九 806)

(三) 春日すらわが待つ人の来じとだにいはずは明日もなほ頼まし

(万七 1285 春日尚 田立顯 公 哀 若 草 嬌 無公 田立顯)

(三) うち群れていざ吾妹子が鏡山越えて紅葉の散らん影見ん

(万十 2103 秋 風 冷成奴 馬並而 去来於野行奈 芽子花見爾) (自撰本貫之集 867)

(三) わが髪と雪と磯べの白波といづれまされり沖つ島守 (土佐日記 890)

(万四 596 八百日往 浜之沙毛 吾恋二 豈不益歟 奥島守)

(元) よする波うちもよせなんわが恋ふる人忘れ貝下りて拾はん

(万十五 3629 安伎左良婆 和我布禰波豆牟 和須礼我比 与世伎伎於家礼 於伎都之良奈美)

(四) 住の江に舟さしよせよ忘れ草しるしありやと摘みて行くべく (土佐日記 909) (万七 1147 暇有者 拾爾將往 住吉之 岸因云 恋忘貝)

(四) 千代経たる松にはあれど古の声の寒さはかはらざりけり

北大文学部紀要

(万六 1042 市原王 一松 幾代可歴流 吹風乃 声之清者 深香聞) (土佐日記 914)

(四) 春の野に若菜摘みにと来しものを散りかふ花に道もまがひぬ

(万八 1424 赤人 春野爾 須美礼採爾等 来師吾曾 野乎奈都可之美 一夜宿 二米) (寛平御時后宮歌合 926)

(以上、古今集については久曾神昇『古今和歌集総覧』に拠り、主として流布本の本文と番号を掲げ、後撰集については岸上慎二校の古典文庫編輯為相自筆天福本に拠った。「貫之集」以下は萩谷朴、朝日日本古典全書所収「貫之全歌集」に拠り、その番号をも併せ掲げた。)

以上、詞句や趣向の上に萬葉集の歌の影響の比較的顕著と思はれる作を拾つたのであるが、固よりこれらの作がすべて萬葉集の歌の影響下にあるとは断じられない。中には偶然的の暗合に過ぎない作もあるであらう。しかし、三、五、七、一〇、一三、一八、一九、二〇、二一、二二、三六、四二などが萬葉歌の影響下にあることは何人の目にも著しく、殊に一三、二〇など、萬葉を模倣した作といふよりはほとんどその焼き直しと言ふべき類似を示してゐる。これらの作は、ほぼ(一)二句或いは三句以上にわたつて萬葉歌の詞句をほとんどそのまま踏襲してゐるもの(三、五、七、九、一二、一三、一四、一九、二〇、二四、二六、三〇、三二、三四、四二等)

(二) 特徴のある萬葉語を使用してゐるもの(二五、二八、三三、三六)

(三) 詞句にも類似があるが、その素材や趣向においても類似するもの(一、四、六、一一、一六、二二、二三、二七、三一、三四、三五、三九、四〇、四一)

(四) 一首の措辞や構造において萬葉歌の影響下にあることの著しいもの(二、八、一五、一七、二二、二九、三七、三八)

の四類に分類できるが、以上の如き貫之の萬葉歌受容の態度から見て、上に挙げた四二首のほとんどは萬葉歌から何らかの影響を受けた作であるとしてよいであらう。今、この四二首の原歌と思はれる萬葉集の歌を萬葉集の巻別に見ると、

卷 一……………3首	卷 二……………2首	卷 三……………1首
卷 四……………1首	卷 五……………2首	卷 六……………1首
卷 七……………7首	卷 八……………7首	卷 九……………2首
卷 十……………9首	卷 十一……………2首	卷 十二……………2首
卷 十三……………0首	卷 十四……………1首	卷 十五……………1首
卷 十六……………1首	卷 十七……………1首	卷 十八……………0首
卷 十九……………0首	卷 二十……………1首	

となり、卷十三・十八・十九の三巻を除き、ほとんど萬葉集の全巻の歌を学んでゐることになるが、卷七・八・十の三巻の歌が目立つて多数を占めてゐるのは、これらの巻々の繊細優美な、また季節感の豊かな作風が古今集の指導的立場に立つた貫之の好尚に迎へられたことを示すものであらう。ただ問題はこれら萬葉歌の影響を受けた諸作が、貫之の萬葉集学習の結果として、直接萬葉集から影響を受けて生れた作品であるか否かといふことであるが、上に見る如く卷七・十・十一・十二など、作者不明の巻々の伝誦歌的色彩の濃厚な諸作が多数を占めてゐる点から見ても、またこの類の歌が平安朝にまで広く伝誦されたらしい形跡から見ても、これらの貫之の作がすべて直接萬葉集について学んだ結果生じたものとは断じられず、伝誦歌乃至はその影響を受けた平安朝の作を学んだものも尠からず含まれてゐると考へるべきであらう。一三や二〇の如き、萬葉集の歌を本歌とした作といふよりはほとんど全くその焼き直しに過ぎない作が、直接萬葉集について作られたものであるとは貫之の見識から云つて考へ難く、ひろく伝誦されてゐた伝誦歌であつたが故に、その場に應じて即興的にこれを改

作して示したところに社交歌としての貫之の手柄があつたものと考へるべきで、かやうな伝誦歌の流れを無視しては貫之にかかる作のあることは理解し難いといふことは既に別の稿でも述べたところである。

しかるに上述の諸作の中には萬葉集の歌の詞句を採りながら、これを別趣の歌に変へた意識的模倣による技巧の著しい作が尠くない（例へば、三、五、七、八、九、一二、一五、二一、二六、二七、二八、三〇、三一、三四、三六、四二等）。土屋文明氏も「明かに意識して、模倣否盗用をやつて居るのが興味がある」と言ひ、「古今集では、貫之以外には貫之程萬葉模倣の跡の見えないのは、貫之は所謂歌学に通じて、ひそかに古歌を知つて居り、人に知れぬやうにこつそり盗用して居つたとも疑へるのである」と論じてゐるが、これは後述の如く貫之の立場に対して理解を欠き、余りに酷評に過ぎる感があるが、確かにこのやうな意識的な萬葉模倣は他の古今集歌人にはあまり類を見ないところであつて、土屋氏の言ふ如く彼が歌学に通じ、萬葉集の古歌にも比較的よく通じてゐたところから生じた現象であるやうに思はれる。上に見る如く、貫之の萬葉模倣の対象となつた歌が萬葉集の各巻にわたつて居り、殊に七に見る如く、平安朝歌人から敬遠せられ、ほとんど他に影響をとどめた作の見られない萬葉集卷五の歌を模倣した作や、同じく他の平安朝歌人に影響の見られない額田王の「三輪山を然も隠すか」を明かに模倣した三の作などがあることは、これらの中に必ずや直接萬葉集について直接学んだ作のあつたことを推測させるものがある。これらの意識的な萬葉模倣の作が、萬葉集の詞句模倣の跡が露はで貫之の作境に融合して居らず、新古今時代の本歌取りの理想に遠いものであることは、弥富氏や土屋氏が論じられた如くであるが、しかしそれを土屋氏の如く盗作に近いものと見るのは酷評に過ぎるものであつて、これらの作の巧拙はさておき、そこに理智的な視角から古歌を吟味し、知的な技巧をもつて古今集の新しい作風を導く上

に指導性を發揮した知性歌人としての貫之の特色を認めるべきではないかと考へる。その萬葉模倣は言はばさうした彼の作風を導き出す過程に生じた習作的作品として理解されるべきものであると考へる。かれの目ざした技巧的・趣味的作風は萬葉集の現実的作風と異質なものであつたから、そこに萬葉集の本質的な影響が見られなかつたのは当然であつて、かれにおける萬葉の享受と研究はもつぱら萬葉集の歌の中に自己の作品の素材として生かし得るものを搜るといふにとどまつたのであるが、かやうな貫之の萬葉享受の姿勢は、爾後の平安朝歌壇における萬葉集享受の角度を決定づけたものであり、ここに貫之の萬葉集享受が平安朝の萬葉享受の歴史において占める大きな先驅的位置を認めなければならないと考へる。

貫之の萬葉研究については、なほその撰に成る『新撰和歌集』の中に萬葉集の歌を十二首（久曾神昇氏は十三首を挙げてゐるが、「折りても見折らずとも見む水無瀬川みなそこかけてさける山吹」（八九）は、『古今六帖』六、山吹にも載せられてゐる歌だが萬葉集の歌ではない）採録してゐるのが注目される。この事に関しては久曾神昇氏の「新撰和歌集と萬葉集」と題する研究^{〔註18〕}があるが貫之の萬葉集に対する関心を見る上に注目すべきものがある。中に、貫之が模倣の対象とした萬葉歌が（三）の萬葉八、¹⁴³⁵（三）の萬葉十²²¹⁹、（元）の萬葉七¹³⁹⁴、（三）の萬葉八¹⁵⁹⁸、（三）の萬葉四⁵⁹⁶と、五首までこの十二首の中に入つてゐるのは注意される。そのほか本書の萬葉歌についてはなほ考察するべき問題も残されてゐるが、久曾神氏の論考もあるので今は簡単に触れるにとどめておく。ただ一言すれば、本書の萬葉歌について、久曾神氏は「萬葉集をも資料としたと思はれる」と述べてゐるが、中には萬葉集と作者を異にするもの、萬葉集と歌詞に大きな開きがあり伝誦の変化を想像させるものなどがあつて、直接萬葉集から採られたとは考へ難いものも尠くないが、貫之の上述の如き萬葉集に対する関心から云つても、

萬葉集から直接採られた歌もあつたと思はれる。

- 註1、『萬葉集撰定時代の研究』（昭和十二年刊）、「一、萬葉集に関する古文獻」。
- 註2、『古文学踏査』（昭和九年刊）、「萬葉集所見」。
- 註3、『古代研究国文学篇』（昭和四年刊）、「萬葉集のなり立ち」。
- 註4、『萬葉集鑑攷』（昭和九年刊）、「萬葉集撰定年代に関する一私見」。
- 註5、『古今集説人知らずの歌の文学史的位置』（国語と国文学）昭和十九年八月号。
- 註6、『萬葉集と大伴氏』（昭和二十六年刊）「萬葉集新説」所収。
- 註7、『萬葉集新釈』上巻（昭和六年刊）、「卷々の解説」。
- 註8、6に同じ。
- 註9、7及び『萬葉集の卷々の性質』（昭和二十八年刊）「萬葉集大成総記篇」など。
- 註10、『萬葉集の芸術性』（昭和十六年刊）「余論」など。
- 註11、『萬葉集の古点』（国学院雑誌）五十三ノ二、昭和二十七年六月。
- 註12、『日本歌学の源流』（昭和二十七年刊）、「二、紀師匠家曲水宴和歌」。
- 註13、『平安稀観撰集解説篇』（昭和二十七年刊）「古典文庫」。
- 註14、『萬葉歌の伝承——継色紙集の場合』（萬葉）第三十九号、昭和三十六年五月。
- 註15、『古今六帖における万葉集』（国語と国文学）昭和三十三年十二月号。
- 註16、『萬葉集校訂の研究』（昭和二十四年刊）、「第三章、萬葉集の伝来」。
- 註17、18、上田英夫博士『萬葉集訓点の史的研究』（昭和三十一年刊）「序章」。
- 註19、『萬葉片々』（昭和二十三年刊）、「撰集に採られた萬葉集の歌」。
- 註20、『古今集説人知らず歌と万葉集』（文学・語学）第十八号、昭和三十五年十二月。
- 註21、『萬葉集と紀貫之』（奈良文化）第十六号、昭和四年四月。
- 註22、『貫之の萬葉模倣』（昭和十八年刊）「萬葉集私見」所収。
- 註23、『古今和歌六帖の萬葉歌について』（萬葉）第二十三号、昭和三十三年四月。昭和三十三年刊『萬葉の伝統』所収。
- 註24、田中道麿の『撰集萬葉徴』によれば勅撰集に採られた萬葉集卷五の歌は「拾遺集」の一首を数へるに過ぎず、また田林義信氏の調査（和歌山大学開学記念論文集1）所収「萬葉集と古今和歌六帖」によれば、『古今和歌六帖』には萬葉集の歌がすくなくとも千百首以上採られてゐるうち、卷五の歌はわづか二首採られてゐるに過ぎない。
- 註25、『日本文学研究』（誠和書院発行）（第十九号、昭和二十六年一月）。